

# 専門学校柔整学科生にみるジェネリック・スキルの実態と その意識

河井正隆

明治東洋医学院専門学校

**キーワード：** ジェネリック・スキル、リテラシー、コンピテンシー、  
専門学校、柔整学科

## 抄 録：

専門学校学生のジェネリック・スキルの実態は如何なるものか、また学生個々において、それらスキルの実態を自覚した上で、学生の意識変容などは生じるものなのか。今回、それらの間に対して論及した。

ジェネリック・スキルを測定する「スキル調査」(PROG)と学生の意識変容などを知る「意識調査」との調査結果から検討した。

1. 「スキル調査」から：リテラシーは総合的に低い傾向にあり、その中でも高い得点を示す力には「課題発見力」と「構想力」とが抽出された。また1年次の成績別でみると、その差異は顕著となる。一方、コンピテンシーを概観すると「対自己基礎力」は高いものの「対人基礎力」は低いことが判明した。これらを先と同様成績別でみると、「対自己基礎力」にその差異が現れる。2. 「意識調査」から：学生自身が捉える自身のジェネリック・スキルは「スキル調査」と概ね一致した。また、「スキル調査」の結果を踏まえた自己の振り返りや行動変容は、成績下位群に多く見られた。

カリキュラム全体を通して、学生のジェネリック・スキルを向上させる教育目標の設定や具体的な教育方法の議論が、今後の課題と思われる。

## 緒 言：

近年、厚生労働省の調査によると同一企業における大卒者の定着率は低下し、2003年から2006年は50%と1998年から2003年の60%から10ポイントも低下する現状となっている。このことを憂い大学教育では就業力の育成が義務化され「大学における社会的・職業的自立に関する指導等(キャリアガイダンス)」(2011年度、大学設置基準)が提出されるに至る。そのことを踏まえ、働くことへの持続力、また社会的・職業的に自立した生きる力、それらの力を発揮させる技能こそジェネリック・スキルといえる。

川嶋<sup>1)</sup>は、知識基盤社会との関連性でジェネリック・スキルを論じてい

る。結論としては、知識基盤社会とは知識の多寡ではなく、学んだ知識を活用して新たな価値を生み出す能力が必要となる社会をいい、その社会においては、ジェネリック・スキルの育成こそが今後の知識基盤社会の軸となる、という。

ジェネリック・スキルの「ジェネリック」とは、一般的や汎用的という意味を持ち、専門的な知識の習得とともに社会人として活躍できる能力とされる。大別すると「自らの知識を活用して問題を解決する能力」と「人間関係として他者と自己との間にベストな状態を維持しようとする能力」とのスキルである。そして、このスキルの向上の育成近年、高等教育段階で求められている<sup>2)</sup>、<sup>3)</sup>。

専門学校は周知の通り職業人育成の高等教育機関である。ここでは、職業人としての専門的知識・技術の習得に特化した教育が行われると共に、社会人としてのジェネリック・スキルの育成は専門学校教育でも必要な要件であることは論をまたない。職業人養成という役割を担う専門学校こそ、ジェネリック・スキルの育成、向上に力を注ぐ必要があるものと思われる。

そこで本調査研究は、それらジェネリック・スキルに焦点を当てた基礎的研究として実施するものである。

具体的な本調査研究の目的は次の通りである。それは、専門学校学生のジェネリック・スキルの実態は如何なるものか、その実態と共にそれらスキルを自覚した上で学生の意識変容などが生まれるのかどうか、それらを調査票から把握し検討する。敷衍して、今回の調査研究を通して専門学校生の学力の土台ともいえるジェネリック・スキルの実態を論及してみたい。

## 調査方法：「スキル調査」と「意識調査」

### (1) ジェネリック・スキルの測定について

今回、ジェネリック・スキルの測定のために、河合塾と(株)リアセックとが共同で開発した「PROG(Progress Report On Generic Skills)」を活用した。

この調査票はジェネリック・スキルを大きく2つに分け、「学んだ知識を活用して課題を解決する力」(リテラシー)と「経験を積むことで身についた行動特性」(コンピテンシー)との能力測定が可能になっている。

以下に、リテラシーとコンピテンシーとを概説する<sup>4)</sup>。

#### 1) リテラシーについて

リテラシーとは先に述べた通り、知識を活用して問題を解決する力をいい、それは「情報収集力」・「情報分析力」・「課題分析力」・「構想力」の4つの力

から構成されている。それらの力を次に説明する。

①「情報収集力」：課題発見・課題解決に向けて幅広い観点から適切な情報源を見定め、適切な手段を用いて情報を収集・調査し、それらを適切に整理・保存する力。

②「情報分析力」：事実・情報を思い込みや憶測ではなく、客観的にかつ多角的に整理・分析・統合し、隠れた構造を捉えて本質を見極める力。さらにこの力は、「言語処理能力」（言語で記号化された情報を処理する力）と「非言語処理能力」（非言語化された情報を捉え処理する力）とに二分される。

③「課題分析力」：さまざまな角度や広い視野から現象や事実を捉え、その背後に隠れているメカニズムや原因について考察し、解決すべき課題を発見する力。

④「構想力」：さまざまな条件・制約を考慮しながら問題解決までのプロセスを構想し、その過程で想定されるリスクや対処法を構想する力。

## 2) コンピテンシーについて

コンピテンシーとは、前述の通り経験から身についた行動特性で、どんな仕事にも転移可能な力をいい、大別すると「対課題基礎力」・「対人基礎力」・「対自己基礎力」の3つに区分される。

そして、それら3つの大項目はそれぞれ3つの下位項目から構成されている。次に、それぞれを簡潔に説明する。

### ①「対課題基礎力」（課題解決に対する基礎力）

ア．課題発見力：さまざまな角度から適切な情報源と手段で情報を収集し、広い視野から現象や事実を捉え、そのメカニズムや原因について考察して解決すべき課題を発見する力。

イ．計画立案力：さまざまな条件・制約を考慮しながら問題解決までのプロセスを構想し、その過程で想定されるリスクや対処法を構想する力。

ウ．実践力：目標達成に向けて自ら行動し、予測した先行きに合わせて全体の動きを調整しながら早めに行動を修正して実行する力。

### ②「対人基礎力」（他者との良好な関係性を築き、問題解決を図っていく基礎力）

ア．親和力：多様な考えを受け入れ、相手の立場に立って考えることで信頼を得て人間関係を構築していく、また自分から多くの人と積極的に人間関係を築いていく力。

イ．協働力：周囲と情報を共有し周りの「やる気」を引き出して協力して課題に取り組み、またリーダー的立場からメンバーを指導しチームや後輩

の意欲を高めていく力。

ウ. 統率力：異なる意見にも耳を傾ける一方、自分の意見も主張しながら交渉や討議を建設的に進めていく力。

③「対自己基礎力」（自己の感情をコントロールし、良い行動習慣を養う基礎力）

ア. 感情制御力：ストレスのかかる場面でも自分の気持ちや感情を把握したうえで状況を前向きに捉え、困難に挑戦していく力。

イ. 自信創出力：自分の強みや弱みといった自身の特徴を理解し、自分に自信をもっていると同時に、機会を捉えて自分を向上させようとする力。

ウ. 行動持続力：自分なりのルールや決まりを作りながら、最後まで粘り強く責任をもって物事に取り組む力（自分にとって必要と思う事柄に継続して取り組む力）。

## （２）ジェネリック・スキルの実態調査

前述したジェネリック・スキルを、1年次（平成24年度入学生）の入学段階ではどの程度身につけているのであろうか。その実態を知る目的でPROG調査を実施したく以下、「スキル調査」という。

「スキル調査」は授業内で実施し（所要時間：約90分）、実施月は平成24年11月である。有効調査票の回収率は90.9%（121名中110名）であった。実際の設問をいくつか次に例示する。

Figure 1: Literacy Question (Information Collection Ability). The question asks to match news snippets (A-F) with categories (A-F). The correct answer is B (Foreign News) and F (Economy).

Figure 2: Literacy Question (Information Analysis Ability). The question asks to identify the correct statement (1-6) based on a line graph showing the change in reading literacy scores for elementary school students from 1st to 6th grade. The correct answer is 6 (The gap between scores widens as the grade increases).

図1 リテラシー問題（情報収集力）

図2 リテラシー問題（情報分析力）

図1は、リテラシーとしての「情報収集力」を測定する設問例である。こ

れは、情報の探索、情報の整理・保存、一次情報の収集をねらいとする設問となっている。

コンピテンシーの測定(問題例)

場面想定形式(短文)

通番	項目	選択肢	係一答数値→高
1	チームで作業に取り組むとき、一人だけ手を抜いているように思える人がいたら、あなたはどのように行動することが多いですか。	A 何か困っているのではないかと声をかける	1 2 3 4
		B 真剣に作業に取り組むように注意する	1 2 3 4
		C 黙って自分の作業に集中する	1 2 3 4
		D 一言に黙装うりと働ます	1 2 3 4

図3 コンピテンシー問題(対人基礎力)

また図2は、同じくリテラシー「情報分析力」を問う設問である。ここでは、データやグラフ、資料の読み取り、批判的な思考を問う設問となっている。

一方、コンピテンシー「対人基礎力：協働力」の測定に関する設問例が図3である。場面を想定した上で、他者の役割を理解しお互いに協力して物事を進めることができるかどうかを、単文形式で問う設問となっている。

以上が今回のジェネリック・スキルを測定する設問例である。

(3) 2年次でのジェネリック・スキルに対する意識

同じ学生が2年次に進学した半年後に、1年次に実施した「スキル調査」を振り返らせ、ジェネリック・スキルの結果をどのように捉えているのか、また「スキル調査」後に、意識や行動の変容が生じたかどうか、それらを知る目的で学生への意識調査を実施した<以下、「意識調査」という>。「意識調査」は、平成25年5月に実施した。

分析では、学業向上のための対策用資料として活用する意味から、成績の上位群と下位群との差異で検討を行った。なお、調査実施日に欠席した学生がいたことや回答に不備があった調査票を削除したため、有効調査票は「スキル調査」からやや減少し、77.7% (121名中94名) となった。

「意識調査」の具体的な設問は次の通りである(回答はすべて4件法)。「質問1: 実感として、普段のあなた自身の傾向と、調査結果は一致していましたか?」、「質問2: 調査の結果は、自分自身を振り返るきっかけになりましたか?」、「質問3: 調査結果をみて、あなたに何らかの意識や行動の変化はありましたか?」、「質問4: この調査を、数年後にもう一度受けてみたい?」

結果:

(1) 「スキル調査」からみたジェネリック・スキルの実態

今回対象とした学生の「スキル調査」におけるジェネリック・スキルの各

スキル（力）は以下の通りである。以下の結果の概要を述べる。示す得点は学生の平均点を表す。

### 1) リテラシーの得点

学生の総合点は7点満点中3.0点（標準偏差：1.73）であり、平均を3.5点と考えると、やや低い傾向にあった。

また、リテラシーにおける各項目の平均点は5点満点中、次の通りである。

①「情報収集力」2.2点（1.40）、②「情報分析力」2.3点（1.50）、③「課題発見力」2.6点（1.38）、④「構想力」2.6点（1.69）となった。これらの平均点を2.5点と考えると、学生の傾向として「情報収集力」が一番低く、「課題発見力」、「構想力」がやや高い傾向にあるといえる。また、情報分析力として「言語処理能力」2.1点（1.41）と「非言語処理能力」2.4点（1.39）とであり、「非言語処理能力」がやや高い傾向にあった。

各項目の得点についての詳細を表1に示す。表中のレベルとは各得点における度数を表す。1点代から7点代までを各レベルの分布状態として表し、1点代をレベル1、2点代をレベル2（以下、省略）とそれぞれ表示する。得点（レベル）が高い程、その力が高いことを示す。リテラシー総合からみると、学生の傾向としてレベル2が110名中34名（30.9%）と一番多いことがわかった。

表1 リテラシーの結果

（レベル⇒上段：N、下段：%）

	平均 (標準偏差)	レベル1 (比率%)	レベル2 (比率%)	レベル3 (比率%)	レベル4 (比率%)	レベル5 (比率%)	レベル6 (比率%)	レベル7 (比率%)
リテラシー総合	3.0 (1.73)	23 (20.9%)	34 (30.9%)	17 (15.5%)	14 (12.7%)	9 (8.2%)	8 (7.3%)	5 (4.5%)
情報収集力	2.2 (1.40)	55 (50.0%)	17 (15.5%)	8 (7.3%)	23 (20.9%)	7 (6.4%)		
情報分析力	2.3 (1.50)	53 (48.2%)	18 (16.4%)	13 (11.8%)	9 (8.2%)	17 (15.5%)		
課題発見力	2.6 (1.38)	33 (30.0%)	27 (24.5%)	20 (18.2%)	16 (14.5%)	14 (12.7%)		
構想力	2.6 (1.69)	49 (44.5%)	11 (10.0%)	10 (9.1%)	12 (10.9%)	28 (25.5%)		
処理力	言語処理力	2.1 (1.41)	53 (48.2%)	29 (26.4%)	8 (7.3%)	4 (3.6%)	16 (14.5%)	
	非言語処理力	2.4 (1.39)	44 (40.0%)	13 (11.8%)	30 (27.3%)	10 (9.1%)	13 (11.8%)	

## 2) コンピテンシーの得点

学生にみるコンピテンシーの総合点は7点満点中3.2点(標準偏差:1.56)であり、平均をリテラシーと同様に3.5点と考えると、若干低い傾向にある。

また、コンピテンシーにおける各大項目の平均点は次の通りである。なお、各大項目の最高点は7点である。①「対人基礎力」3.2点(1.64)、②「対自己基礎力」3.7点(1.51)、③「対課題基礎力」3.4点(1.61)とそれぞれを示す。3.5点を平均と考えると、「対自己基礎力」が一番高く「対課題基礎力」が次に続く。一番低い大項目は「対人基礎力」となる。

各項目における得点の詳細は、表2に示す通りである。リテラシーと同様、表中のレベルとは、各得点における度数を表す。前述の総合点(平均3.2点)でみると、1点代から7点代までを各レベルとして示す。先と同様に、1点代をレベル1、2点代をレベル2(以下、省略)とそれぞれ置き換える。結果から、学生の傾向としてはレベル3が110名中28名(25.5%)と、一番多いことがわかる。

表2 コンピテンシーの結果

(レベル⇒上段:N、下段:%)

	平均 (標準偏差)	レベル1 (比率%)	レベル2 (比率%)	レベル3 (比率%)	レベル4 (比率%)	レベル5 (比率%)	レベル6 (比率%)	レベル7 (比率%)
コンピテンシー総合	3.2 (1.56)	18 (16.4%)	21 (19.1%)	28 (25.5%)	17 (15.5%)	17 (15.5%)	7 (6.4%)	2 (1.8%)
対人基礎力	3.2 (1.64)	18 (16.4%)	21 (19.1%)	32 (29.1%)	9 (8.2%)	17 (15.5%)	11 (10.0%)	2 (1.8%)
対自己基礎力	3.7 (1.51)	7 (6.4%)	20 (18.2%)	23 (20.9%)	34 (30.9%)	12 (10.9%)	8 (7.3%)	6 (5.5%)
対課題基礎力	3.4 (1.61)	11 (10.0%)	24 (21.8%)	29 (26.4%)	21 (19.1%)	12 (10.9%)	6 (5.5%)	7 (6.4%)
対人基礎力								
親和力	3.5 (1.68)	13 (11.8%)	26 (23.6%)	23 (20.9%)	13 (11.8%)	20 (18.2%)	11 (10.0%)	4 (3.6%)
協働力	3.5 (1.72)	18 (16.4%)	15 (13.6%)	19 (17.3%)	27 (24.5%)	15 (13.6%)	10 (9.1%)	6 (5.5%)
統率力	3.2 (1.66)	23 (20.9%)	22 (20.0%)	17 (15.5%)	25 (22.7%)	11 (10.0%)	10 (9.1%)	2 (1.8%)
対自己基礎力								
感情制御力	3.5 (1.71)	14 (12.7%)	20 (18.2%)	22 (20.0%)	24 (21.8%)	13 (11.8%)	10 (9.1%)	7 (6.4%)
自信創出力	3.7 (1.69)	14 (12.7%)	14 (12.7%)	26 (23.6%)	21 (19.1%)	19 (17.3%)	9 (8.2%)	7 (6.4%)
行動持続力	3.8 (1.60)	7 (6.4%)	22 (20.0%)	19 (17.3%)	26 (23.6%)	17 (15.5%)	14 (12.7%)	5 (4.5%)
対課題基礎力								
課題発見力	3.5 (1.73)	14 (12.7%)	20 (18.2%)	25 (22.7%)	20 (18.2%)	13 (11.8%)	11 (10.0%)	7 (6.4%)
計画立案	3.4 (1.73)	16 (14.5%)	27 (24.5%)	17 (15.5%)	18 (16.4%)	19 (17.3%)	7 (6.4%)	6 (5.5%)
実践力	3.6 (1.51)	11 (10.0%)	15 (13.6%)	21 (19.1%)	35 (31.8%)	17 (15.5%)	6 (5.5%)	5 (4.5%)

出典：(株)リアセック「PROG 全体傾向報告書」2013.7.24

### 3) 学生の成績の差異からみたジェネリック・スキル

ここでは、今回対象となった学生の1年次の成績とジェネリック・スキルとの関連性を述べる。

1年次の成績とは、年間を通して全科目（6科目）の平均点数（100点満点）を指す。また成績の差異の基準は、その分散を考慮し、成績上位群を平均80点以上（N=42）、成績下位群を79点以下（N=64）とした。

表3 成績の差異から見たリテラシー

	総合 (平均点)	4つの力(平均点)				処理能力 (平均点)	
		情報収 集力	情報分 析力	課題発 見力	構想 力	言語処 理能力	非言語処 理能力
成績上位群(N=42)	3.4	2.4	2.7	2.8	3.0	2.5	2.4
成績下位群(N=64)	2.7	2.0	2.0	2.5	2.4	1.8	2.4
F 値	4.15	2.32	6.59	1.24	2.60	6.53	0.04
*p.<.05	<b>.044*</b>	.131	<b>.012*</b>	.269	.110	<b>.012*</b>	.850

※成績上位群と成績下位群とにおける表中の数字は、得点を示す(5点満点)。

※成績上位群:80点以上、成績下位群:79点以下。

表4 成績の差異から見たコンピテンシー

		①成績上位群 (平均点)	②成績下位群 (平均点)	①-②	F 値	有意確率 *p.<.05
総合		3.4	3.1	0.3	.024	.877
対人基礎 力	親和力	3.4	3.5	-0.1	.013	.909
	協働力	3.6	3.5	0.1	.664	.417
	統率力	3.3	3.1	0.2	.533	.467
対自己基 礎力	感情制御力	3.4	3.7	-0.3	6.383	<b>.013*</b>
	自信創出力	4.1	3.4	0.7	4.746	<b>.032*</b>
	行動持続力	4.2	3.5	0.7	.009	.925
対課題基 礎力	課題発見力	3.7	3.5	0.2	2.891	.092
	計画立案力	3.4	3.4	0.0	.083	.773
	実践力	4.0	3.4	0.6	.081	.776



※①成績上位群と②成績下位群、①-②のそれぞれの表中の数字は得点を示す(7点満点)。

結果は表3の通りである。成績の差異から見ると成績上位群が下位群より高得点を示す項目は、リテラシーでは「情報分析力」、その中でも「言語処理能力」の有意な異が見られ、成績上位群が下位群よりも高得点を示す。

一方、コンピテンシーでは表4に示す通り、「自信創出力」と「感情制御力」とに成績の差異で有意な差が示された。項目としては「感情制御力」で成績下位群が高得点群よりも高い得点を示し、「自信創出力」に成績上位群に下位群よりも高得点をそれぞれ示した。また、統計的には有意な差が見られないものの、「行動持続力」においては、成績上位群が下位群より高い得点を示す結果となった。注目すべき点は、これらはいずれも「対自己基礎力」における項目群という点である。

## (2) 2年次における学生の意識変容(意識調査)

「意識調査」における回答分析は、成績の差異で行った。その理由は、今後の学習支援の資料収集として、1年次を終えてジェネリック・スキル自体が成績全体にどのような影響を与えているかを知るためである。

### 1) 「スキル調査」と学生自身が捉えるジェネリック・スキルとの関連性

1年次の「スキル調査」を終え、その結果から学生自身が捉える自己の傾向性との一致度を、2年次の「意識調査」で検討した。設問文は「実感として、普段のあなた自身の傾向と、調査結果は一致していましたか?」として、回答には「とても一致」～「まったく一致しない」の4件法とした。

結果を表5に示す。結果から、学生自身が捉えるジェネリック・スキルの一致度は成績の区別無く同様の傾向を示し、その中でも「まあ、一致」していると捉える学生がいずれも約6割で一番多い。

### 2) 「スキル調査」と自己の振り返り

次に、「スキル調査」が学生自らを振り返る契機となったかどうかを意識調査で問うた。設問文は「調査の結果は、自分自身を振り返るきっかけになりました?」とし、回答には「良いきっかけになった」～「まったくならなかった」の4件法とした。

回答結果を表6に示す。結果では、成績の差異で比べると「良いきっかけになった」と「まあ、きっかけになった」とを合わせた肯定的回答は、成績上位群で約58%、下位群で約71%と、成績下位群が約13ポイントも上回る結果となった。つまり、成績下位群の学生にスキル調査が自らを振り返る契機となったことが分かった。

### 3) 「スキル調査」からの意識や行動の変化

さらに、「スキル調査」から学生自らの意識や行動の変容が行われたどう

かを、意識調査から問うた。設問文は「調査結果をみて、あなたに何らかの意識や行動の変化はありましたか？」であり、回答は「多くあった」～「まったくなかった」の4件法とした。

結果は表7に示す通りである。結果から前節と同様、肯定的回答の「多くあった」と「まあ、あった」とを合わせ成績上位群は約28%、下位群は49%と、成績下位群が約21ポイントも上回る結果となった。つまり、成績下位群に意識や行動変容を来したことが窺われた。

これまでの3つの設問回答を概観して全体的に言えることは、雑駁ではあるが、成績下位群に肯定的回答者が多いということである。

表5 学生自身が捉える調査結果との一致度 N、(%)

	とても一致	まあ、一致	あまり一致しない	まったく一致しない	合計
成績上位群	3(7.0)	26(60.5)	9(20.9)	5(11.6)	43(100.0)
成績下位群	3(6.0)	30(60.0)	14(28.0)	3(6.0)	50(100.0)

表6 スキル調査と自己の振り返り N、(%)

	良いきっかけになった	まあ、きっかけになった	あまりならなかった	まったくならなかった	合計
成績上位群	7(16.3)	18(41.8)	12(27.9)	6(14.0)	43(100.0)
成績下位群	10(19.6)	26(51.0)	10(19.6)	5(9.8)	51(100.0)

表7 スキル調査からの意識や行動の変化 N、(%)

	多くあった	まあ、あった	あまりなかった	まったくなかった	合計
成績上位群	1(2.3)	11(25.6)	20(46.5)	11(25.6)	43(100.0)
成績下位群	3(5.9)	22(43.1)	16(31.4)	10(19.6)	51(100.0)

表8 数年後の再調査の是非 N、(%)

	是非受けてみたい	まあ、受けてみたい	あまり受けたくない	まったく受けたくない	合計
成績上位群	4(9.3)	15(34.9)	15(34.9)	9(20.9)	43(100.0)
成績下位群	9(17.7)	15(29.4)	17(33.3)	10(19.6)	51(100.0)

#### 4) 数年後の再調査の是非

最後に、数年後に再度ジェネリック・スキルとしての PROG 調査を受けてみたいかどうかを問うた。設問文は「この調査を、数年後にもう一度受けてみたい？」であり、回答は、「是非受けてみたい」～「まったく受けたくない」の4件法とした。

結果を表8に示す。その結果もまた前節などと同様、肯定的回答の「是非受けてみたい」と「まあ、受けてみたい」とを合わせ成績上位群は約44%、下位群は47%と、成績下位群がやや約3ポイント上回る結果となった。つまり、成績下位群にジェネリック・スキルの結果を肯定的に受け止め、かつ再調査を望む学生が多いことが分かった。

以上のことから、意識調査の結果から成績下位群の学生ほどジェネリック・スキルの結果を肯定的に捉え、自ら振り返り、意識や行動変容を起こすことが窺われた。

#### 考 察：

##### 1) 「スキル調査」から

今回の入学段階における「スキル調査」から、本校学生のスキルの傾向を窺い知ることができた。

繰り返しにはなるが、リテラシーを概観する次のことが言える。それは、レベル2にピークを置くことが特徴で、総合的に低い傾向にあることが分かった。入学試験における全入時代を迎えた今、その特徴がそのままリテラシーの結果を示しているのかも知れない。

しかしその中でも、今回の調査から学生はさまざまな角度や広い視野から現象や事実を捉え、その背後に隠れているメカニズムや原因についての考察を通し、問題解決のプロセスを構想し対処法を構想する力はあるといえる。ただし、情報分析力の一部である非言語的な処理能力（数字や図表を駆使する力）に難を示す結果ともなった。それは、1年次の成績別で見ると、その差異は顕著となる。入学前からそれらの力が潜在的にあると考えられ、入学後にそれらのスキルを育成させる取組と共に、スキルが低い項目への底上げもまた、今後の課題と思われる。

一方、コンピテンシーも概観すると次のことが言える。自分の感情ややる気をコントロールする力（対自己基礎力）は高いものの、他の人と信頼関係を築きチームとして動かす力（対人基礎力）は低いといえる。また、やる気はあるものの、他者との協力のもとで信頼関係を築くことに難を示すところが

窺われる結果となった。されには、成績別でみると、対自己基礎力にその差異が顕著となる。このことは、社会の変化や人間関係の変化に適応する能力として、人や課題の本質を理解し、自分を理解する能力の育成が今後の課題と思われる。

## 2)「意識調査」から

2年次に行った「意識調査」から、1年次に実施した「スキル調査」結果は、学生自身が捉える自身のジェネリック・スキルと概ね一致していることが分かった。これは成績の区別無くいえる。学生の主観的評価として、PROG調査の妥当性が証明された結果となった。

一方、成績の差異により「スキル調査」の結果を踏まえた自己の振り返りや行動変容は、成績下位群に多く見られることが分かった。それは、成績下位群ほど自分自身を見つめる不安が高く、そのことがジェネリック・スキルへの関心を高め、スキル調査の結果を自己変革の一つに目安にする傾向が窺われたのかも知れない。このことは、意識調査の数年後も再調査を受けてみたい、との回答が成績下位群に多いことから推測できる。つまり、成績下位群ほど、ジェネリック・スキルへの興味・関心は高いのかも知れない。敷衍して、潜在的に自己変革を強く望む学生が成績下位群の学生なのかも知れない。

### まとめ：

今回の「スキル調査」の結果は学生の入学段階における実態であり、それらのスキルが3年間という学校生活全般において、どのような変容を生じるのかは不明である。しかし、今後医療人として社会で活躍するためにも、各スキルを向上させる具体的な取り組みを提示し、行動変容を来す継続的な関わりが専門学校教育では必要と思われる。

併せて、社会で活躍している卒業生のジェネリック・スキルを調査し、その比較から、柔道整復師として必要不可欠なジェネリック・スキルを抽出し学生指導に活用することも、専門学校教育の上からも今後重要と思われる。

さらには、カリキュラム全体を通して学生のジェネリック・スキルを向上させる教育目標の設定や具体的な養成方法を議論する必要性もあろう。全入時代の今、専門学校教育に課せられた喫緊の課題であると思われる。

### 謝 辞：

本調査研究は、「平成24年度全国柔道整復学校協会学校運営改善等助成事業」からの研究助成金交付により実施したものです。心から感謝申し上げます。

す。また、本調査にご協力頂いた学生の方々に深謝いたします。

**参考文献：**

- 1) 吉原恵子「大学教育とジェネリックスキルの獲得」『兵庫大学論集』第12号, 2007年、p.163-178
- 2) 濱名篤（研究代表者）『学士課程教育のアウトカム評価とジェネリックスキルの育成に関する国際比較研究（課題番号 19330190）』平成 19－21年度科学研究費補助金基盤研究（B）、平成 22 年（2010年）3月
- 3) Kawaijuku Guideline 『Kawaijuku Report』2011.11、p.53-61
- 4) 学校法人河合塾・株式会社リアセック『PROGの強化書』